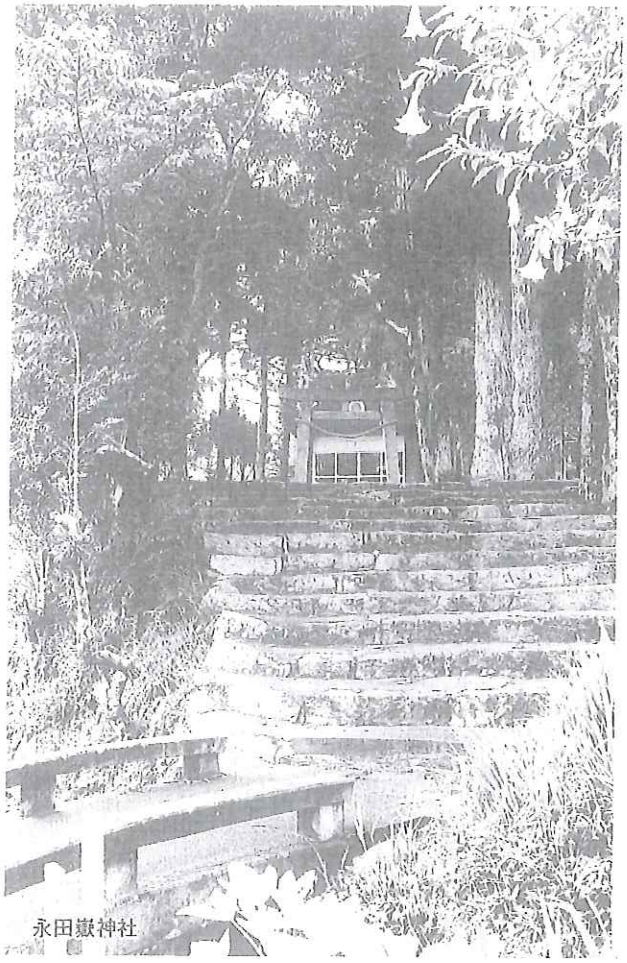
文献資料紹介
《第13回》

屋久島神社調書

山本秀雄

この『屋久島神社調書』は『鹿児島県神社明細書』（昭和二十七年～一部昭和三十年の報告書）という県神社本庁の所蔵する綴込の中から、屋久島関係を抜き書きしたノートに名付けたものである。

太平洋戦争終戦直後、米国駐留軍は日本の国家神道の復活を警戒し、神社活動を規制していたために氏子崇敬会組織は壊滅状態に陥り各地の神社は維持管理もままならない時代であった。


永田嶽神社

昭和二十七年講和条約の発効で神社信仰に対する規制も緩和され、県神社本庁でも神社活動の正常化を図り、崇敬会組織の拡大と見直し、教化指導を行なう必要から実態調査がなされたもので、昭和二十一年宗教法人令によって届出のあった神社を一定書式によって報告をさせている。

屋久島でも当時村民を氏子にする村社を対象に調査し、口永良部島を含む十八社が報告され前記明細書に綴込まれている。報告の神社は幕末まで全て宮之浦益救神社（南島唯一の式内社であった）の末社であった為に、かつては村名を冠して益救神社と呼ばれていたという。

従って明細書記載の神社は創建も古いものと思われるが、大事な由緒起原に不明な点が多くて物足りない。その上、当時も村の運営であったと思われる吉田の森山神社・湯泊の大山祇神社は明細書から漏れている。報告を怠ったか、他に調査基準に満たない点でもあったのか、綴込には無い。更に氏神・山ノ神・田ノ神・道祖神・水神様・恵比寿神・鬼子母神・岳ノ神（一品法寿大権現）などの小祠も一切含まれていない。これらの小祠も何時か記録にとどめる必要があろうが、今回は吉田と湯泊の二社を聞書して加え、又昭和二十七年以降に創建された長峯神社と屋久島大社をも取り上げて紹介することにした。島の方々が自分の村を知る一つの手立にもなろうかと思うからである。

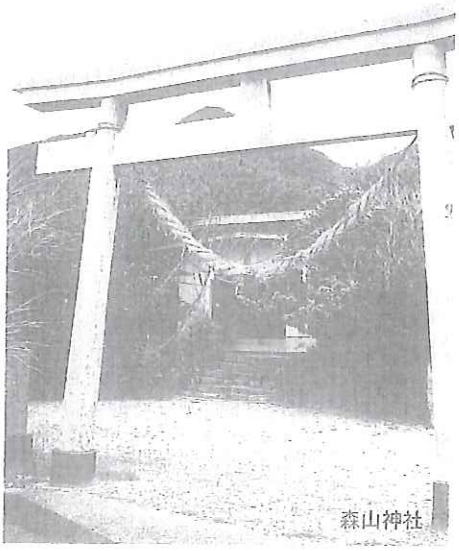
神社調書　昭和二十七年十月二日明細書ヨリ抜萃

一、永田嶽神社

祭神　天津日高彦火々出見命
鎮座地　上屋久町永田字多々良二七九七番地
大祭日　一月五日、春祭二月十七日・秋祭十一月二十四日
社殿坪数　本殿三坪・拝殿五坪
境内地坪数　四百七十四坪
氏子数　三百五十戸・崇敬者約千人
由緒　本社縁起考に由れば当社は益救神社の摂社格にして、祭祀料三斗を附け置かれ、益救神社の例祭、新嘗祭等には神官出張するを以て例とせしが、明治十年丁丑の乱より県治一変し社式村祭に復したり。

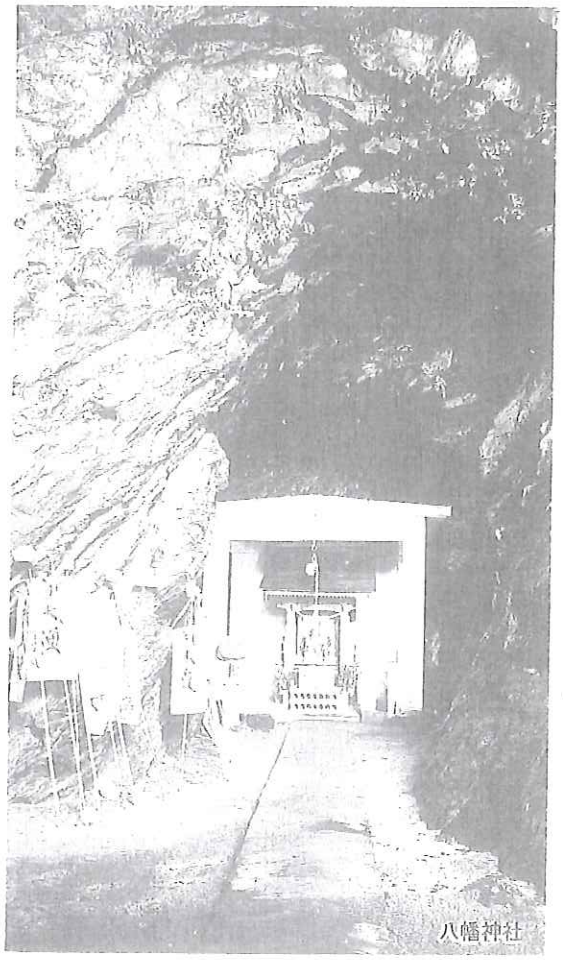
二、森山神社

祭神　大山祇命・鬼子母神（通称お産の神）
鎮座地　上屋久町吉田字下村
例祭日　旧九月十三日
社殿坪数　本殿八坪・拝殿十二坪
境内地坪数　約四百五十坪
氏子数　百戸・三百人
由緒　共に不詳、記録類は太平洋戦争中に行方知れずになった。村では一般に女の神であると云い、又志戸子の住吉神社と姉妹であると、そして吉田の森山神社がお姉さんの神様であると。尚、吉田字上村に日高神社と云うがあり。祭神は不明であるが本殿は二坪、拝殿はない。例祭日は旧十一月十八日。


森山神社

三、八筈嶽神社

祭神　仲哀天皇・応神天皇・神功皇后・帯中津日子命・気長帯姫命
鎮座地　上屋久町一湊字八筈山二二九二番地
大祭日　二月十五日、秋祭十一月二十七日
社殿坪数　本殿三坪・拝殿十・五坪
境内地坪数　六十・八三坪
氏子数　二百十戸・崇敬者約七百人
由緒　創立年代不詳にして往古は里内山麓近くに神社ありしを、約百五十年程前、里民某八筈の岩窟前にて「正八幡大菩薩」の六字を刻みある黒色の一石を発見し、村民之を神石なりと称し、幸い同岩窟は天然の神社々地として結構なるに依り、右六字に関係ある右に記す五柱の御祭神を奉祀して神事を執行するに至れり。


八幡神社

四、住吉神社

祭神　底筒男命・中筒男命・上筒男命・息長帯姫命

境内神社　八幡神社（仲哀天皇・神功皇后）

鎮座地　上屋久町志戸子字向ノ平南東五七六番地

大祭日　八月二十九日、春祭二月十九日・秋祭十一月二十六日

社殿坪数　本殿三坪・拝殿九坪

境内地坪数　一千六百五十三坪

氏子数　百十戸・

崇敬者約三百五十人

由緒　創立年代不詳なれども往古より現在社地に鎮座し全島各神社と同様神佛混淆によりいつしか社殿荒廃す。明治二年廃佛棄釋令後神社の復興するに至り、明治六年十月社殿改築し神威旧に復し以て現在に及ぶ。

住吉神社

五、益救神社

祭神　天津日高彦火々出見命・塩土翁・豊玉彦命・豊玉姫命・玉依姫命・大山祇命・木花開耶姫命

境内神社　恵比須神社（事代主命）

鎮座地　上屋久町宮之浦字水洗尻二七七番地

大祭日　四月十日、春祭二月十七日・秋祭十一月二十三日

社殿坪数　本殿三坪・拝殿十五坪・舞殿六坪

境内地坪数　九千八百七十二坪

氏子数　五百戸・崇敬者約一千五百人

由緒　創立年代不詳、但延喜式内社大隅国駅謨郡一座名神小。本社の儀は上古御嶽宮と称し、種子・屋久の両島一に尊敬を極めたる鎮守の社にして、御嶽（宮之浦岳・永田岳・翁岳・栗生岳）の頂上に本社御祭神の神祠ありて、往古より全島十八ヶ部落の島民春秋の二季頂上の神祠に奉賽と祈願の参拝をなすを恒例とし、後代全島各社の御嶽神祠遙拝所として創建神社の形態に遷りしものならんか、本社の如き未だに登山道入口に御嶽神祠の遙拝所有り、然共南海孤島なる昔時の事にしあれば、時代の変遷は自ら荒廃をまぬがれず、ときに文久三年藩庁鹿政を改め廃典を擧するに随て管内神社を糺調し、先づ本社を再興し（慶応元年六月着工、同三年四月竣工）造営を終て、神領五十石を奉持し、更に藩幣の社格となし、明治五年壬申三月右に十石を重ね都合六十石、神官の官禄十六石に重ねるに七石を給し、副属伶官等の禄夫々宛行われ、同年十一月迄は神領及諸費一切官費たりしも維新の改革迄にして、その後は一ヶ年中祭祀料六円、神官の禄四石に減少す。之とても明治十年度までにして、民子の拠出金を以て一切の社費を弁ず。

註＝本社棟札記に示されし御祭神九柱の内、火須世理命は明治七年五月二十三日川向神社へ、恵比須神は境内恵比須社へ明治五年三月三日御遷座。

尚、益救神社は延喜式神明帳に登載の式内神社であったため、いくた変遷のあとも知られる。江戸期は薩摩藩の官幣社、明治期以降は戦前まで県社の格式を有して、その由緒書の類は多く見られる。ここに慶応元年に記した棟札記を合せて取り上げて置く。

益救神社棟札記

大隅の国、駅謨郡、屋久島宮之浦の皇大神は延喜の朝延の神明帳なる大隅国五社の内、所謂益救神社に座すを、何の頃にか有りけむ一品宝珠権現と奉れり。しかるに何となく御社衰ろえ坐て、社司も無く成りにける事を、大守茂久（忠義）公、国父中将大隅守（久光公）聞こしめして去にし文久三癸亥年、畏くも小田原河内藤原秀房此の社司たるべき命を蒙り、翌元治元年甲子五月島に下りぬ、これを以て神号を旧に復し奉りて、益救神社と申す御額を大守公の御名代にて重富公子（久光

公の第三子で島津重富家を相続した忠鑑公か）の御手にて遊したるを、神前に掛け奉り、御霊代の御鏡も御上より新に鋳調しめ給い、御社御再興の事申上しに、慶応元年乙丑六月より経営あり、大工棟梁瀬島喜平次、小工福谷喜太郎外に大工九人、木挽五人、日雇四人、当屋久島居住の木挽二人、都合二十二名、宮柱も太敷く御板も厚く千木も弥高く目出たく功成ぬ、時に在番奉行有村壮一殿、惣掛見聞役宮内喜左衛門殿、書役染川助次殿、外に見聞役、書役、姓名棟札に記しある。当村この時の庄屋渡辺平左衛門、近藤新太郎、辨指木原清右衛門、信心の友によりて記おく。

小田原河内　秀房　花押

益救神社

六、川向神社

祭神　火須世理命

鎮座地　上屋久町宮之浦字火ノ上山二四三八番地

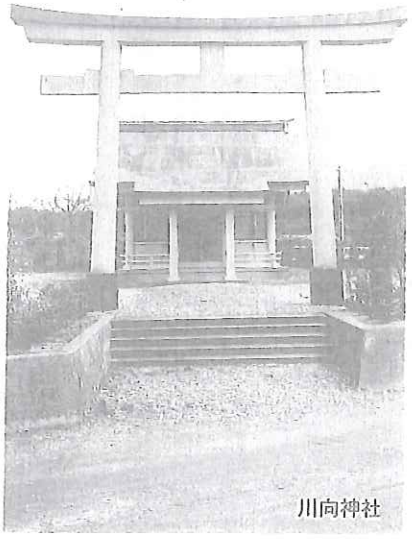
大祭日　七月十五日、春祭二月十七日・秋祭十一月二十三日

社殿坪数　本殿一坪・拝殿六坪

境内地坪数　四百九十二坪

氏子数　五百戸

由緒　創立年代不詳、尚、御祭神名不明なれば明治七年五月二十三日、益救神社より火須世理命一柱を当社へ合祀す。



川向神社

七、菅原神社　一名天満神社、又は楠川神社とも云う。

祭神　菅原道眞公

鎮座地　上屋久町楠川字仲町八二番地

大祭日　六月二十五日、春祭二月十八日・秋祭十一月二十四日

社殿坪数　本殿二・二五坪・拝殿八・七五坪

境内地坪数　三百十六坪

氏子数　百七戸

由緒　本祭神は人皇百十五代中御門天皇の御世、元文五年五月十七日村人姓不詳次郎右衛門の母某海浜長瀬と称する所に於て、神像を拾

菅原神社

ひ上げ奉りしを村吏直に宮之浦奉行所に届け出、奉行取立てて天神様の神像と定めしかば、村人相議して鎮守の神と崇め奉り、社を字後町アコウ木下に建立して鎮座となせしが、如何なることにや種々危怪なる祟りありとて現今の地に遷座せるものなり、但し其の年代詳かならず。

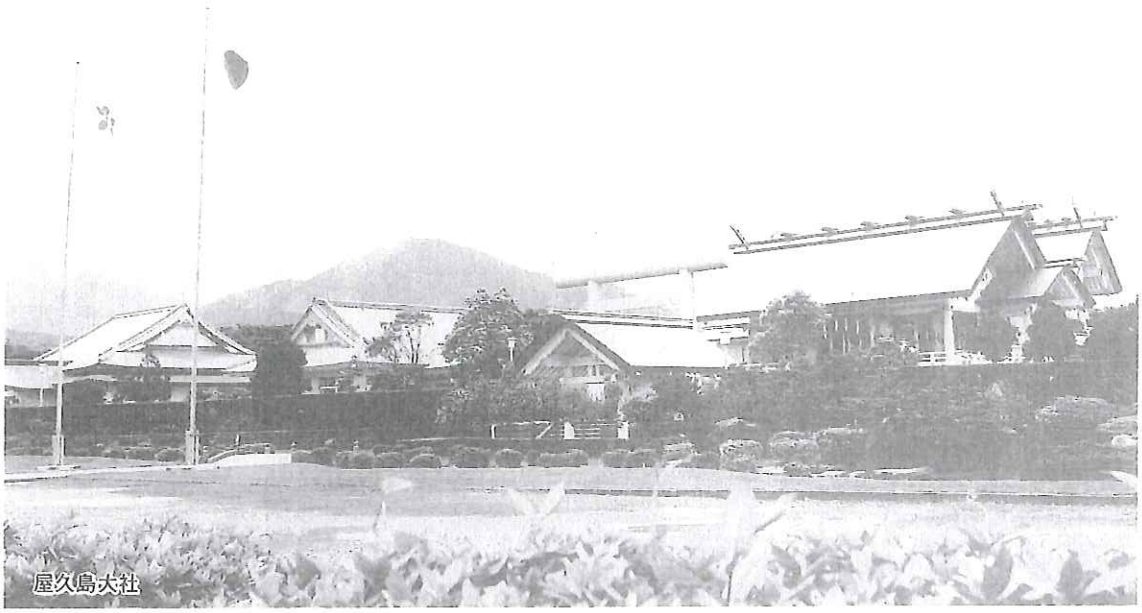
註＝現在の仲町に遷座したのは宝暦十三年（一七六三）二月であったと『三国名勝図会』に記されている。

八、屋久島大社

祭神
第一殿　伊邪那岐命・伊邪那美命・天照大神
第二殿　菅原大神（天神様）
境内摂社　まさかびの大神・大国主命・猿田彦大神
境外末社　瓊々杵尊荒御魂社（瓊々杵尊）
鎮座地　熊毛郡上屋久町楠川
大祭日　御鎮座記念大祭八月十八日、春季例祭三月十八日
社殿坪数　本殿六十五坪・内拝殿八坪・外拝殿二十七坪
社務所坪数　社務所六十九坪・渡廊下十四坪
祖霊殿坪数　七十七坪
境内地坪数　六千五百三十四坪
創祀　昭和五十二年八月十八日

由緒

記紀に記された、人類の大御祖神にして、伊勢皇大神宮天照大神の御親神なる伊邪那岐命・伊邪那美命は、屋久島の石塚山に天降りましたとの御神示を受けた、屋久島大社初代斉主柴昌範は、昭和三十八年八月十八日に石塚山山頂の巨大な神石の岩戸の中に祠を祀りましたが、なお御神命により、屋久島大社の創建を畢生の悲願となし、昭和四十八年より此の地を御鎮座の地と定め、同五十一年三月十八日起工、同五十二年八月十七日の夜、厳粛に遷座の儀を終え、十八日に正鎮座し給う。


屋久島大社

日本列島の北の護りは、青森県八戸市の蕪島神社にして、奉祭主神は伊邪那岐命・伊邪那美命なり。同じ二神を祀る屋久島大社は日本の南の護りとして漸くここに定まり、国家安泰・世界平和の礎となる最も重要なる神社であります。

第二殿に祀り奉る菅原大神（天神様）は、昭和七年柴昌範に、屋久島の地に自生するガジュツより製する恵命我神散を授けて、人命救護の使命を与え給うたが、実は菅原大神は仲継の神にして伊邪那岐命・伊邪那美命の御神薬なりと云う。

神は病いに苦しみ、不幸に悲しむ人を救わんと、あらゆる形をもって慈愛の手をさしのべ給う。神薬をもって身体を整え、血を浄めて心を正し、御神徳のお導きによって魂を救わんとし給うたのであります。

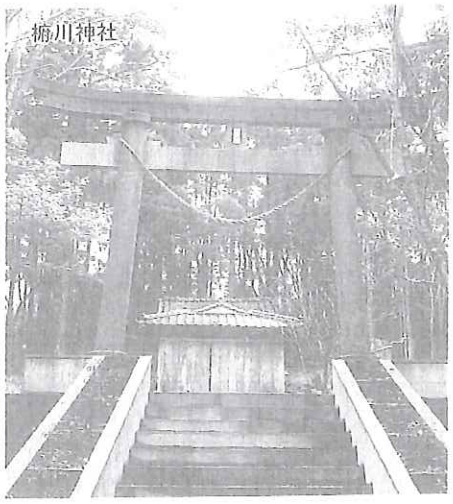
尚、伊邪那岐命・伊邪那美命は良縁の霊験あり、菅原大神は学業の神として知名なり。摂社に祀り奉るまさかびの大神は屋久島誕生の初めより、鎮守し給う屋久島全島の氏神なり。大国主命は天照大神の御使命により、日本の国造りをし給うた神、また縁結びの神として知名なり、猿田彦大神は皇孫を日本の国土に導き給いし国津神にして、地祭、方災解除。家屋敷守護、開運、交通安全等に御神徳御霊験あらたかなり。

境外の末社・瓊々杵尊荒御魂社に祀り奉る瓊々杵尊は、天孫にして日向の高千穂峰に降臨し給うとされているが、此の地の前岳に降臨し給い楠川の海波寄する処にワラジをぬぎ給いしと、此の地に屋久島大社と同時に創建し奉りしなり。

九、楠川神社

祭神　建速須佐之男命
鎮座地　上屋久町楠川小字楠川字神山一六一三番地
大祭日　九月十五日、春祭二月二十五日・秋祭十一月二十五日
社殿坪数　本殿二・二五坪・拝殿六坪
境内地坪数　七百九十五坪
氏子数　三十五戸

由緒　本社縁起考に「当社草創は往古のことなるべく寛政五年勧請の棟札あり」と記されし如く、地形や社頭の老杉老松の繁茂の状況より推し量る時、屋久島十八ヶ部落奉斎の各神社中唯一の景勝地にして氏子又敬神の熱意厚く諸施設完備せり。然るに氏子数少なき故か本県神社明細書に脱漏せり、依って昭和二十二年十二月一日神社本庁所属神社として設立登記完了す。

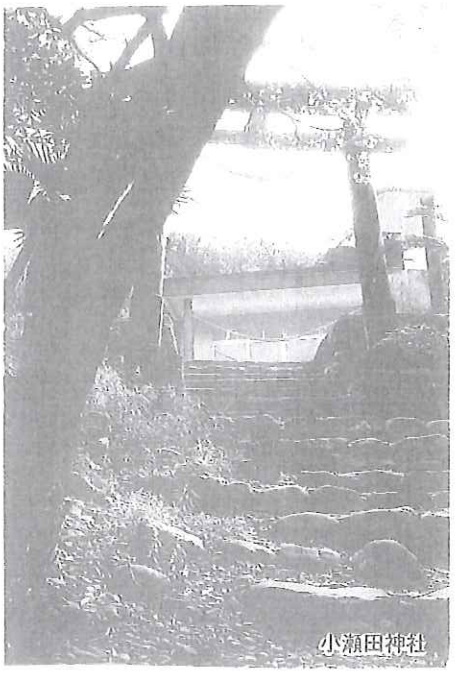

楠川神社

十、小瀬田神社

祭神　大国主命
鎮座地　上屋久町小瀬田字松山一八四番地イ
大祭日　九月十五日、春祭二月十九日・秋祭十一月二十五日
社殿坪数　本殿一坪・拝殿六坪
境内地坪数　二百六十五坪
氏子数　百十戸

由緒　本社創設及び祭神奉崇の由来詳かならず、本社の縁起考によれば小瀬田は往時小字供養石野と称する場所にありて、之を黒石野村と唱へ東西十方の大村落と伝へし由なるが、如何なる訳にや当時屢々怪異災難等にて村居住不容易なるより現今場所に移転せりと記せり。由之で観之に、本社も当時供養石野村に鎮座ありて村落の移転と同時に現今の場所に遷座したる疑う可らず。

註＝黒石野村は更にその昔は屋久町の平野辺りにあり、怪異災難はその頃から起り、従って小瀬田村は三回目の移住先ということになろうか。


小瀬田神社

十一、長峯神社

祭神　天津日高彦火々出見命（益救神社の御祭神）
　　宮地嶽三柱大神、瓊々杵尊　尚、棟札記に手置帆負大神・
　　屋船豊受姫大神・屋船久々能遅大神・彦挟知大神と記す。

鎮座地　上屋久町長峯

大祭日　九月二十三日

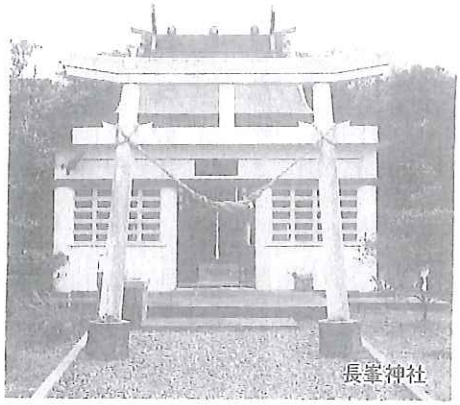
社殿坪数　本殿五坪・拝殿九坪

境内地坪数　約五百坪

氏子数　約九十戸

由緒　創建は昭和二十九年九月二十三日、長峯村は大昔、供養石野とも黒石野とも云って小村があったらしいが災異が重なり、いつしか廃村となってのち久しくこの地に人家はなかったが、今次太平洋戦争に敗れ、海外からの引上げ者、戦災者、復員軍人等に食糧と住居を提供する目的で、政府は昭和二十年十一月緊急開拓事業実施要領を決定し、昭和二十一年十月自作農創設特別措置法が制定されて、国・公・民有地の適地に一定希望者を入植させて開拓事業が始まった。これに基いて長峯地区にも三回に亘って百七十四戸が入植した。三回三組を一つに統合して昭和二十六年四月に農林省指定の開拓地になり、今までの小瀬田区から分かれて長峯開拓村は独立して一区を結成、文化の中心である小瀬田小学校の長峯移築もあり、又村の繁栄と安全を祈る神社造営も決定して昭和二十九年に先づ「宇迦之御魂神」他三神を祀り、更に昭和三十二年全戸を氏子にした新本殿・拝殿を建立したが、台風によって社殿が損傷した為に昭和五十年十一月八日鉄筋コンクリートに建替え現在に至っている。（追記）「宇迦之御魂神」他三神は先に入植した牧田と云う人が個人的に福岡から勧請して祀っていた神様であったという。

現社殿の造営は、建築委員長横山義政、委員寺田秋雄・林隆治・藤原初雪・寺田宗之・堂後実・赤井田元幸・安藤義之、施工業者藍染茂、大工安藤時助・寺田清彦、区長泊重常、宮司吉元宮雄の諸氏であった。


長峯神社

金峰神社

十二、金峯神社

祭神　金山比古命・金山比女命

境内神社　花尾神社（丹後局）

鎮座地　上屋久町口永良部島字供養の向一二二四番地

大祭日　六月十五日（旧暦）、春祭四月三日（旧暦）

社殿坪数　本殿二・二五坪・拝殿七・五坪

境内地坪数　六百七十五坪

氏子数　二百戸

由緒　創立年共に不詳となっている

註＝明治二十年鹿児島県庁発行の『島嶼見聞録』あり、ここに記す口之永良部島の神社のことを左に紹介して置く。

宗社を金の御嶽の神社と云う、御嶽の麓にあり、金山比古ノ命、金山比女ノ命二神を祭れり、神体は自然石を安置す。旧暦四月三日・六月十五日に祭祀を行う。棟札あり、神宝・神具なし、蛭子神社は湾内海岸にあり、三所共に一月七日・八日を以て祭祀す、漁業者の建立する所なり。また村東に一赤林の中に山神を祀る祠あり（前田部落から入る）。尚現在地の金峯神社は御嶽の噴火の為に遷座されたもの。